

ICT を用いた Speaking 指導 ～明確なフィードバックを目指して

廣瀬 正巳

1. はじめに

近年、外部試験を利用する大学入試が増え、その対応に迫られることもあるのではないだろうか。中でも、対策が難しい分野・領域が「話すこと」かと思われる。私もあるスピーキング教材を使用して、授業内で「話すこと」に関する指導を行った経験がある。ペアワークをベースに ALT と授業を行ったが、外部試験の Speaking 分野で直接的に成果が上がったのかと、もどかしい思いがあった。

そのもどかしさの 1 つは、生徒のアウトプットに対するフィードバックが的確にできているのかという点であった。この点については、生徒が実際に受験した外部試験の結果からも同じことを強く感じた。生徒に返却された個票には、Speaking に対する「□／○点中」といった総合的なスコアと、各観点に関する数値・段階的な評価、または「～ができる」というような CAN-DO の到達目標的なフィードバックのみがされていたからである。

本稿で紹介する授業をデザインするきっかけとなったのは、生徒の英語力の向上を具体的に促すためには、生徒個々のアウトプットに対して、「評価がよくなかった原因」や「どこを改善すると評価が上がるのか」を具体的にフィードバックすることが必要であると考えたことだ。また、「話すこと」に対する生徒のモチベーションを上げるためには、実際の場面で外国人とコミュニケーションがとれて、自分の英語が「通じた」という体験が欠かせないといえる。生徒同士でのペアワークでは、客観性という観点から、その達成感は低いように思われる。そこで、コンピュータという客観的なツールによって、自分の発話を可視化させ、対機械ではあるが、生徒に自分の話した英語が相手に「通じた」という経験を実感してもらうことで、英語に対するモチベーションを上げたいと考えたことが、本授業を考えるもう 1 つの大きな動機となった。

2. 新しい授業観のもとで

先述した問題点を解決する授業をデザインする上で、平成 29・30 年改訂の学習指導要領で発表された「主体的・対話的で深い学び」と「個別最適な学び」を根底において授業を考えた。

「主体的・対話的で深い学び」の「主体的」という観点においては、「学ぶことに興味や関心をもち」、「見通しをもって粘り強く取り組み」、「自己の学習活動を振り返って次につなげる」というキーワードを実践することを目標とした。次に「対話的」という観点においては、他者との対話はもちろんだが、自己との対話を通して「振り返り」を行わせることを実践した。最後の「深い学び」については、「話すこと(やり取り・発表)」を英語の総合力と捉え、「知識を相互に関連付けてより深く理解し」、「問題を見い出して解決策を考えたり、思いや考えをもとに創造したりすること」を実践する形とした。

また、授業進行のコアとして、生徒自身に自分の思考を客観的に認知させ、自分のアウトプットを改善させることと、個別最適な学習の場(授業)を提供することを意識し、生徒が自主的に学ぶことも目指した。

3. 授業展開 I

前半では、PowerPoint のデクテーション(文字起こし)機能*を使ったタスク活動を通し、生徒の発話内容を可視化し、客観的なフィードバックのもと音読練習を行わせた。

* PowerPoint のデクテーション機能はサブスクリプション型の Microsoft 365 でのみ利用可。

まず準備として、Microsoft 社のメッセージングアプリである Teams の「課題配信機能」を使って 3 種類の PowerPoint スライドを事前に配信する。
(事前配布スライド)

スライド①：ウォーミングアップ用

スライド②：スピーチ録音用

スライド③：スピーチ推敲用

【タスク活動①】＊スライド①を使用

メインの活動の前に、3つのウォーミングアップを通して、生徒に発話の練習をさせる。

〈ウォーミングアップ①〉

生徒に早口言葉を発話させ、PowerPointのディクテーション機能を使い、発話をテキスト化させる。

手順

- PowerPointのホーム画面にある「マイクボタン」の設定から「英語(米国)」を選択させる。
- 設定後に「マイクボタン」をクリックするとディクテーションが開始するので、教室のスクリーンに提示した早口言葉をひと息で3回、正しく表示されるまで発話させる。



図1 PowerPointによるディクテーションの設定画面

〈ウォーミングアップ②〉

ペアワークで、英語を使って英単語の説明をさせる。

手順

- ペアを組ませ、片方の生徒にのみ提示した英単語の意味を英語で説明させ、もう一方の生徒にその単語が何かを推測させる。説明をする生徒には、始める前にPowerPointの「マイクボタン」をクリックさせ、自分の英語の説明をディクテーションさせる。
- その後、教室のスクリーンに模範解答を示しながら、その単語の説明に必須の単語やフレーズが、自分の説明に入っているかを確認させる。

〈ウォーミングアップ③〉

②と同様の状況で、課題内容のレベルを上げる。実際の授業では、「枕草子」の冒頭部をそのまま提示し、古文表現を英訳させるなど教科横断的な要素も盛り込み、ハードルを上げて挑戦させた。

ディクテーション機能を用いると、自分が発話し

た内容がスライド上に正確に保存されるので、〈ウォーミングアップ②、③〉の答え合わせの段階で、生徒は自分の発音が正確に機械に読み取られなかった事実や、模範解答とのずれを客観的に認識でき、次に向けて修正をすることができていた。

【タスク活動②】＊スライド①を使用

ウォーミングアップが終わったら、OREOスタイル(Opinion, Reason, Example, Opinion)による即興スピーチを行わせる。

タスク活動②では、メインのスピーチテーマを扱う前に「Do you like apples?」という単純な題材を与え、即興スピーチに挑戦をさせた。アウトプットについては、タスク活動①と同様にディクテーション機能を作動させ、スピーチの内容を保存させた。その後、PowerPointのマーカー機能を使って、自分が発話したスピーチの内容をOREOに基づいて色分けさせることで、4つの要素が盛り込まれているかを分析させ、単純な題材でも万遍なく盛り込むことの難しさを体感させた。

【タスク活動③】＊スライド②を使用

本来の目標であるスピーチテーマを提示し、タスク活動②と同様の方法でスピーチをさせる。

実際の授業では、スピーチテーマとして、日本英語検定協会 HP(<https://www.eiken.or.jp/eiken/>)より引用した“Some people say that parents today give too much freedom to their children. What do you think about that?”を扱った。事前配信したスライドに生徒の発話を記録させ、ここでもOREOに基づいて色分けをさせた。

＊スピーチが終了した時点で、テキスト化されたスピーチの内容をスライド③にコピーさせる。(タスク④で使用)

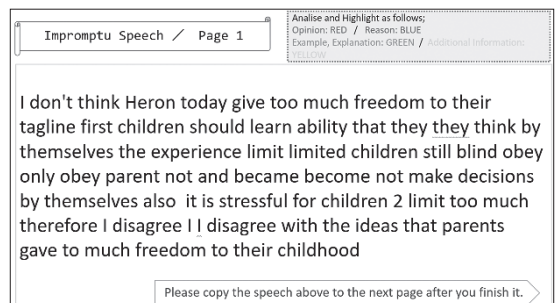


図2 ディクテーション機能でテキスト化されたスピーチ
(※生原稿のため、誤りもそのまま表記された状態)

【タスク活動④】＊スライド③を使用

スピーチの精度を高めるために、原稿の推敲とスピーチ練習を行わせる。

まず、タスク活動③でテキスト化したスピーチを貼り付けたスライド③を使い、文法的な訂正や内容の推敲、文章構成の吟味をさせ、原稿の完成度を上げる。その際、必ず OREO の観点から見直すことを指示する。

完成した原稿を TTSReader(ttsreader.com)などのテキスト読み上げサイトに貼り付け、各自で発音練習を行わせる。速さなどの調整ができることから、生徒の実力に応じた学習をすることができる。

【タスク活動⑤】＊スライド③を使用

最後に、完成した原稿をもとに再度スピーチを行わせ、録音したデータを提出させる。

ここでは生徒のパソコンに内蔵されたボイスレコーダーを使用し、スピーチを録音、保存させる。保存した音声ファイルをスライド③に貼り付けて Teams にて提出させる。

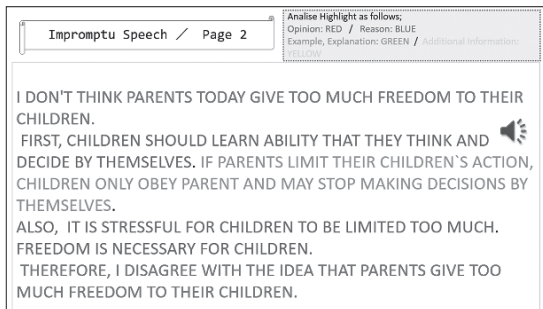


図3 スピーチ音声を貼り付けた画面

(1・5文目は赤、2・4文目は青、3文目は緑で色分けされている)

ここまでが授業の前半となる。

4. 活動に対する評価

教員はここで提出された各スライドから、以下のことを読み取り、客観的な評価をつけることができる。まず、事前配布の「スライド①」からはウォーミングアップ①～③への取り組み具合がわかり、活動に対する生徒の主体性を測ることができる。「スライド②」の場合、スライド単体からは、生徒のその時点でのスピーチ能力と OREO を自分で分析して振り返る能力を、スライド②と③を見比べた場合

は、生徒がどのような点を改善できたのかという成長力を確認することができる。スライド③の添付音声ファイルからは、音読の成果を読み取ることができる。

5. 授業展開Ⅱ

活動の後半として、提出されたスピーチをもとに、オンライン掲示板アプリを使用したディベートの授業を行う(本授業では Padlet を使用)。

【タスク活動⑥】

生徒の提出したスライドの中から、トピックの本質をついた論点や生徒の興味を引きそうな論点を整理して、Padlet に表示する。そこから生徒に自分の意見やほかの生徒の意見に対する反論を自由にリアルタイムで書きこませる。さらにその中から、的を射た意見をピン止め(画面上で固定)し、新たな議論に発展させる。

平均的なクラス定員である 40 名の生徒にディベートをさせることは非常にハードルが高い。今回は競技ディベートのように時間制限内での発話を求めるのではなく、自分の言いたいことがしっかりとまとまるまで待ったあとで、自分の意見を表現することを許容した。話すことに自信がない生徒や抵抗がある生徒も、自分の意見が平等にシェアされ、授業で取り上げられることで「自分も授業に参加している」という意識をもつことができ、モチベーションのアップにつながった。

6. 生徒が自立して学習できる授業デザイン

本授業の流れを見ていただいてわかるように、ICT を効果的に導入することで、教員は生徒の活動を傍らで見守るいい意味での「教えない傍観者」に徹することができる。これにより、実際に生徒がどのように活動しているのかを観察することができた。一方、生徒個々の ICT 機器のトラブルが多く、対応に追われることも少なくないのが実情であるため、今後の課題としたい。

次にもう 1 つの目標であった「個別最適な学び」という観点から本授業を振り返りたい。「個別最適な学び」は、「学びの個別化」と「生徒が自立して学んでいくこと」が重要であるといえる。この 2 点が「書くこと」や「話すこと(発表)」の活動において

どのように達成されたのか、またその過程で ICT の活用がどのように有効だったのかを見ていく。

本授業では、従来のエッセイライティングで認めていた電子辞書の使用に加え、翻訳サイトの「Google 翻訳」や「DeepL Translate」、音声翻訳アプリ「VoiceTra」などの使用も認めた。ただし、自由に使わせるのではなく、回数制限を設け、機械翻訳を使った部分を明示するよう指導した。ICT 導入以前であれば、自分の考えを英語で伝えたい場合、生徒は辞書から強引に抜粋した不自然な表現をそのまま使うことが見受けられた。しかし、この活動では自然な表現や言い回しを使って意見が書かれていることも多く、ICT 導入が生徒の個別の意見を自分の英語で正確に伝える一助になっていると考えられる。一方、機械翻訳の精度は日々向上しているが、機械翻訳の結果が本当に自分の言いたいことと一致しているのかを判断するための、以前とは違った「文法力」が求められており、教員もそれに合わせた指導を考えていく必要がある。

また、スピーチのための音声指導という観点からも、ICT の効果は非常に大きいと感じた。教科書に QR コードが掲載され、各生徒が本文の音声に個別アクセスすることが容易になったことは言うまでもない。しかし、それは教科書という一斉に与えられた同一教材に対してであり、完全な個別化対応とまではいえない。本授業で扱った「話すこと(発表)」に関していうと、生徒が作成するスピーチの内容はそれぞれ異なる。ICT の普及以前は、スピーチ原稿のモデルリーディングは、ALT か教員による読み上げ以外に方法がなかった。この状況下で、スピーチのパフォーマンステストを課すと、意欲的な生徒は授業中や放課後に ALT や教員をつかまえて、指導を仰ぐ一方、あまり英語に興味関心を示さない生徒は、ほとんど練習しないままパフォーマンステストに臨む様子が見られた。

本授業で使用した TTSReader のようなテキスト読み上げサイトは、生徒がそれぞれ違った内容のスピーチ原稿を用意しても、完全に個別最適化された形で学習を進めることを可能にするツールであるといえる。

7. 本授業における生徒の反応

本授業を通して感じた生徒の反応や気づきは以下

のとおりである。

・「授業の進行」

生徒の各活動は可能な限り個々に委ねたので、英語が不得意な生徒も積極的に参加できていた。

・「話すことの活動」

人前で英語を話すことに抵抗がある生徒は、通常の授業内では短い英語の発話でもだんだん声が小さくなることもあったが、コンピュータ相手の場合は、その抵抗感が減り、楽しみながらコンピュータにディクテーションをさせていた。

・「話した英語をさまざまな観点から振り返る経験」

実際に話すと、基本的な文法を正確に使用できていないこと、発音が不正確でコンピュータに意図しない単語として認識されたことなど、生徒自らが振り返りをするものの重要性に気付いていた。

・「カタカナ英語では通じないという気づき」

一斉授業では、個々の生徒の発音指導にまで踏み込むことは難しいが、今回の授業を通じて、カタカナ英語がコンピュータに正確に認識されないことから、プロソディ(発話における強勢、抑揚、リズムなど)の重要性を実感していた。また、正確に自分の発話がテキスト化されることで、「通じた」という実感と満足感をもたせられた。

この授業を通して得られた経験やデータをもとに、授業をあらたにデザインし、生徒の Speaking 力の向上を考えているところである。

8. 最後に ～ ICT と各分野領域の相性を探る

コロナ以降、各学校の ICT 化が一気に進んだことは言うまでもない。しかし、どの場面でも ICT の使用が適切なわけではなく、どの場面での使用が効果的なのかを探索段階に移ってきているといえる。今後も ICT の力を借りて、生徒の興味を引き出す授業を進められるよう試行錯誤していきたい。

参考文献

文部科学省(2023)。「有識者インタビュー GIGA スクール構想×個別最適な学び(上智大学 教授 奈須正裕 氏)」文部科学省 HP. <https://www.mext.go.jp/studxstyle/special/51.html>

(山梨県立甲府南高等学校 教諭)